

2022 年度必修英語における専門的学習成果の測定

中島 直樹

1. はじめに

城西短期大学において 2022 年 4 月に 2022 年度英語力調査が実施され、外国人留学生を除く 79 名の短期大学ビジネス総合学科 1 年生が受験した。この調査は英語における専門的学習成果の測定のため 2002 年度から毎年 4 月と 1 月に年 2 回実施している。2020 年度に限っては新型コロナウイルス感染拡大が続く中、前期・後期ともオンライン授業となったことにより 1 月のみのオンライン形式での調査実施となったため、データは参考値にとどめている。また、2018 年度と 2019 年度の 2 年間については、中島が海外勤務となって実施できなかったためデータはなしとなっている。

短大を取り巻く環境が大きく変化したことにより、それに伴い様々なタイプの学生が入学するようになった。短大入学生の英語力低下の傾向は年々顕著になり、特に優秀な学生の入学も以前に比べると少なくなった。それに加えて、ある程度基礎力のある学生とあまり基礎力のない学生との差が以前より大きくなったように感じられる。そのため、実際の授業に入る前に学生一人一人の英語力がどの程度であるかをあらかじめ認識しておくことがより必要となっている。また本学科は、専門的学習成果を「職業人として活躍できる幅広い教養と、英語、情報、メディア、会計、販売・接客、事務処理等のビジネススキル」と定め、さらに、コミュニケーション基礎英語の学習成果を「実際のコミュニケーションで活用できる基礎的な英語力」と定めており、その測定方法も求められている。このような観点から、本学では新入生全員に対して毎年英語力調査を実施しており、その調査結果を基に、坂戸キャンパスの一年次の必修科目であるコミュニケーション基礎英語を能力別のクラス編成にし、これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図るとともに、一年後の 1 月の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施して、どれだけスコアが伸びたかを調査し、上記の学習成果の測定を試みる取り組みを行っている。本論は、本年度学生の英語力調査の結果を、それ以前の学生の結果と比較することにより、本年度に入学した学生の英語力がこれまでの学生とどう違うのかということ明らかにするとともに、1 年後の結果と比較することにより、年間を通じてどの程度学習成果を獲得できたのかを測定しようとする試みである。

2. これまでの英語力調査の結果を振り返って

はじめに、2002（平成14）年度の英語力調査から振り返ってみたい。2002年度に英語力調査の問題を改訂し、それ以降、現在まで継続して同じ問題を使用しているため、年度ごとの比較が可能となっている。出題形式は全問マークシート方式、試験時間は1時間、全50問で100点満点の試験であった。93名が受験し、全体の平均点は約56.9点であった。学科別の受験者数と平均点は表1の通りである。

表1 2002年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	67名	約57.8点
現 代 文 化	26名	約54.7点
全 体	93名	約56.9点

実際の得点分布を見てみると、かなり大きな広がりを持っていたことが分かる。90点以上のかなり基礎力のある学生が6名、次いで75点から89点までのある程度基礎力のある学生が10名、29点以下のほとんど基礎力のない学生が7名おり、その中間に30点から74点までの中間層があった。中間層の中にもいくつかの山があり、60点から74点までの上位の層（26名）と45点から59点までの中位の層（24名）と30点から44点までの下位の層（20名）とにおおよそ分類でき、この3つの層が2002年度の新入生に占める割合は実に75パーセントを超えていた。

次に、2003（平成15）年度の結果について見てみたい。59名の新入生全員が受験し、全体の平均点は約54.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表2の通りである。

表2 2003年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	47名	約55.0点
現 代 文 化	12名	約52.6点
全 体	59名	約54.5点

前年度の英語力調査の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては2.8点、現代文化学科においては2.1点、全体では2.4点下がった。また、この年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科よりも高い結果となった。得点分布の形にもある程度の変化が見られた。前年度と違う点は、90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなった（前年度は6名）ことと、中間層の領域の形が逆転したことであった。30点から74点までの中間層にはい

くつかの山があることが前年度の英語力調査で分かっていた。そして、前年度は60点から74点までの上位の層に26名、45点から59点までの中位の層に24名、30点から44点までの下位の層に20名の学生がいて、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、2003年度は上位の層に16名、中位の層に17名、下位の層に17名と、中間よりやや下に比重が移っていた。

次に、2004（平成16）年度の結果について検討したい。43名の新入生が受験し、全体の平均点は約50.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表3の通りである。

表3 2004年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	33名	約50.5点
現 代 文 化	10名	約50.4点
全 体	43名	約50.5点

前年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては4.5点、現代文化学科においては2.2点、全体では4.0点下がった。2002年度から年々下降の一途をたどっていて、短大に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下していたことを如実に示す結果となっていた。全体の得点分布は基本的には前年度とそれほど変わっておらず、前年度をほぼ継承していた。90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなったことも、中間層の形が逆転したことも前年度と同様であった。75点から89点までのある程度基礎力のある学生は5名となり、前年より3名減少した。中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に9名、45点から59点までの中位の層に13名、30点から44点までの下位の層に13名の学生がいた。2002年度には、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、2003年度から中下位に比重が移り、その傾向は2004年度も続いていた。

次に、2005（平成17）年度の結果について検討したい。80名が受験し、全体の平均点は約56.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表4の通りである。

表4 2005年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	57名	約56.9点
現 代 文 化	23名	約55.5点
全 体	80名	約56.5点

前年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては6.4点、現代文化学科において

は5.1点、短大全体では6.0点上昇した。前の年の平均点を上回ったのは初めてのことであった。2005年度は、奨学金制度が充実していたため、高等学校の評定平均値3.5以上の学生が多く入学し、基礎学力を持って入学した新入生たちが平均点を押し上げた。数値的に見て、2002年度の水準まで上昇した結果となった。全体の得点分布を見ても、短大全体では6.0点も平均点が上昇したので、まったく異なった形になった。90点以上のかなり基礎力のある学生はひとりもいなかったが、75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名おり、この層が本学を引っ張る牽引車的存在になっていた。受験者数が80名なので、約4人に1人がここに属していたことになり、この年度の躍進を支えた原動力のひとつになっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が6名いたが、この割合は前年度とほぼ同じであった。30点から74点までの中間層は55名であった。この中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に18名、45点から59点までの中位の層に16名、30点から44点までの下位の層に21名の学生がいた。前年度は、得点層が下位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、2005年度はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。2003年度から中下位に比重が移ってきていて、平均点を下げる最大の理由となっていたが、2005年度になってようやくその流れが変わった。

次に、2006（平成18）年度の結果について検討したい。82名が受験し、全体の平均点は約48.3点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表5である。

表5 2006年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	82名	約48.3点

この年度に経営情報実務学科と現代文化学科が統合されてビジネス総合学科が誕生した。新学科になって初めての英語力調査であったが、前年度の平均点約56.5点から8.2点下落の約48.3点となった。前年度にいったん上昇に転じたが、2006年度にまた大きく下げた。上昇の流れがわずか一年で途絶えてしまった。全体の得点分布を見てみると、受験者数は前年とほぼ同数であったにもかかわらず、形は前年とまったく違うものになっていた。前年はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。基礎力のない学生もいたが、基礎力のある学生もほぼ同数いた。特に、前年は75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名もいて、この層が本学の全体的な底上げの役目を果たしていたが、2006年度はその層には6名しかいなかった。ピークは40～44点のところであり、16名が集中していた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が9名いたが、この層に関しては、前年の6名と大差がなかったと考えてよいであろう。90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなかったことも前年と同様であった。中間層の上位の層には15名おり、前年の18名とほとんど変わりはない。しかし、中位の層は前年の16名から

7名増の23名、下位の層は21名から8名増の29名となっており、中間層の中でもとりわけ中下位の増加が目についた。つまり、75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層が減少した分がここに集まっていたのである。前年度は奨学金制度が充実していた年度であり、高校の評定平均値3.5以上の学生が多く入学し、ある程度基礎力のある学生の層の中核となっていたが、2006年度は奨学金制度の廃止に伴い、その層が激減し、代わりに中間層の中下位の学生が増えた。これが平均点を8.2点下げた最大の原因であった。

次に、2007（平成19）年度の結果について検討したい。受験者数69名、全体の平均点は約51.0点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表6である。

表6 2007年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69名	約51.0点

ビジネス総合学科になって2回目の英語力調査であったが、前年度の平均点約48.3点から2.7点上昇の約51.0点となった。前年度と比べ、平均点が若干上昇したため得点分布の形状にわずかな変化が見られたが、特に大きな変化ではなかった。得点のより低い層により多くの学生が集中するというそれまでの傾向を継承していたと言ってよいであろう。30点から74点までの中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層に12人、45点から59点までの中位の層に18人、30点から44点までの下位の層に22人となっており、やはり基礎力のない学生の多さが目立った。75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は、前年の6名から11名に増加していた。前年度のピークは40～44点のところであったが、2007年度は50～54点に移動しており、これらが2007年度の英語力調査の明るい材料であった。

次に、2008（平成20）年度の結果について検討したい。受験者数81名、全体の平均点は約51.0点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表7である。

表7 2008年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81名	約51.0点

受験者数は12名増加、平均点は前年とほぼ同じであった。だが、前年度と比べ、得点分布の形はわずかに異なっていた。ピークは50～54点と40～44点のところであり、いずれも10名。30点から74点までの中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層に15人、45点から59点までの中位の層に23人、30点から44点までの下位の層に22人となっており、中位の層が下位の層を1名ではあるが上回った。得点のより低い層により多くの学生が集中しやすい傾

向は変わっていなかったが、中位の層が増加したことはよい材料であった。85～89点の層に5名、90点以上のかなり基礎力のある学生が2名いたことも喜ばしいことであったが、29点以下のほとんど基礎力のない学生が11名（前年は6名）おり、平均点が上がらない原因になっていた。かなりできる学生もいたが、それと同数のまったくできない学生もいて、平均すると前年並みであった。

次に、2009（平成21）年度の結果について検討したい。受験者数69名、全体の平均点は約46.0点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表8である。

表8 2009年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69名	約46.0点

受験者数は12名減少、平均点は前年と比べ5点マイナスであった。得点分布の形も当然異なっていた。前年度のピークは50～54点と40～44点のところ（いずれも10名）にあったが、2009年度は30～34点のところの下がってきており、12名の学生がここにいた。また、第2のピークもその前後の40～44点と20～24点にあり、低得点層の膨らみが目立った。30点から74点までの中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層に14名、45点から59点までの中位の層に14名、30点から44点までの下位の層に24名となっており、下位の層の占める割合がかなり多かった。29点以下のほとんど基礎力のない学生も12名おり、前年と同様、この層が平均点を大きく押し下げていた。90点以上のかなり基礎力のある学生が2名（内1名は留学経験者）いたことが唯一の明るい材料であった。

次に、2010（平成22）年度の結果について検討したい。受験者数81名、全体の平均点は約53.5点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表9である。

表9 2010年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81名	約53.5点

受験者数は12名増加、平均点は前年と比べ7.5点上昇であった。前年と比べて平均点が大きく上昇した年は過去には2005年度のみであったので、これが二度目ということになる。7.5点の上昇は2005年度の6.0点を上回っていた。2005年度は奨学金制度が充実し、多くの優秀な学生が入学して平均点が上昇した。しかし2010年度は2005年度のような奨学金制度はなかったが、大きく平均点が上昇した。その原動力となったのが3月の入試で入学した学生達であった。彼らのほとんどが城西大学やその他文系4年制大学の受験に失敗し、第二希望で短大に入学し

た。一度は受験勉強をやった実績と短大卒業後に編入したいという気持ちを持ち合わせた彼らが平均点を押し上げたのだと思う。これまでの短大入学生はいわゆる受験というものを経験しないで入学することが多かった。そのような状況の中で、2010年度は受験に失敗した者たちが新しい風を吹かせてくれた。得点分布の形を見てみると、前年度のピークは30～34点のところであり、12名の学生がそこにいた。また、第2のピークもその前後の40～44点と20～24点にあり、低得点層の膨らみが目立っていた。それに対して、2010年度のピークは50～54点と40～44点のところへ上がってきていて、10名の学生がここにいた。第2のピークは下方30～34点のところ（前年度のピーク）に9名いたが、70～74点に7名、60～64点に6名、両ピーク間の45～49点に6名おり、前年の下膨れした形とは明らかに異なっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生は前年の12名から8名に減っていた。90点以上のかなり基礎力のある学生は4名おり、前年より2名増えていた。

次に、2011（平成23）年度の結果について見てみたい。57名が受験し、全体の平均点は約43.7点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表10である。

表10 2011年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	57名	約43.7点

受験者数は24名減少、平均点は前年と比べ9.8点下落であった。受験者数は大幅減、平均点も調査を始めてから現在までの過去最低、下げ幅も過去最大であった。前年に7.5点と大幅に上昇しただけに残念な結果であった。過去に平均点が前年より大きく上昇した年度は2005年度と2010年度の二度であったが、いずれも翌年には大きく平均点を下げていた。特に2011年度の下げ幅は大きく、2006年度の8.2点下落を上回っていた。2005年度は、奨学金制度が充実していた年度であり、多くの優秀な学生が入学して平均点が上昇した。また2010年度は、4年制大学の受験に失敗して短大第二希望で入学した学生たちが、短大卒業後に4年制大学に編入したいと強く思い、また受験勉強をした経験を活かして平均点を押し上げた。このように考えてみると、2005年度と2010年度の二年だけが例外なのであって、当時の短大入学者の英語基礎力は年々著しく下がっていたと言わざるをえない。得点分布を見てみると、ピークは40～44点のところであり、12名の学生がここにいた。第2のピークは50～54点のところへ8名いたが、1名少ない7名の学生が20～24点のところにおいて第3のピークを形成していた。90点以上のかなり基礎力のある学生はいなくなり、最高点は86点、次点は78点であった。グラフの形も以前の下膨れした形にもどってしまった。39点以下の学生が20名もおり、それが全体の35パーセント以上を占めるという散々な結果であった。

次に、2012（平成 24）年度の結果について見てみたい。54 名が受験し、全体の平均点は約 44.9 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 11 である。

表 11 2012 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	54 名	約 44.9 点

受験者数は 3 名減少、平均点は前年と比べ 1.2 点の上昇であった。前年の英語力調査で過去最低を記録し、2012 年度の結果が注目されたが、受験者数も平均点も前年とほぼ同程度の結果となった。依然として短大始まって以来の過去最低水準であった。平均点が 45 点を下回った年は 2011 年と 2012 年の二年だけであり、いかにこの年の短大 1・2 年生に英語基礎学力が不足していたのかがよく分かる。得点分布の形を見てみると、前年度と同様ピークは 40～44 点のところにあり、12 名の学生がここにいた。30～34 点に 8 名、50～54 点に 7 名おり、これらが第 2 のピークを形成していた。第 3 のピークは 65～69 点と 20～24 点にあり、それぞれ 6 名の学生がいた。最高点は 92 点、次点は 88 点であり、その次はずっと下って 74 点であった。2002 年以來、30 点から 74 点までの層を中間層としてきたが、2012 年度はその中間層以下が 54 名中 52 名を占め、かつてはある程度存在していたそれ以上の層がほぼ消滅してしまった。中間層の中を詳しく見てみると、60 点から 74 点までの上位の層に 9 名、45 点から 59 点までの中位の層に 13 名、30 点から 44 点までの下位の層に 21 名となっていて、やはり下位の層ほど人数が多くなっていた。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は 9 名、90 点以上のかかなり基礎力のある学生は 1 名であった。

次に、2013（平成 25）年度の結果について見てみたい。51 名が受験し、全体の平均点は約 45.8 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 12 である。

表 12 2013 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	51 名	約 45.8 点

受験者数は 3 名減少、平均点は前年と比べ 1.2 点の上昇であった。過去二年続けて最低レベルに留まっていたが、受験者数も平均点も前年とほぼ同程度であった。2011 年度から 2013 年度にかけては、三年連続 45 点前後というかつて経験したことのないほどの低い結果であった。得点分布の形を見てみると、ピークは 40～44 点と 30～34 点のところにあり、それぞれ 9 名の学生がここにいた。第 2 のピークは 55～59 点にあり、7 名の学生がいた。次いで、45～49 点のところに 6 名、50～54 点と 35～39 点のところにそれぞれ 5 名となっていた。30 点から 74 点ま

での中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層が激減してわずか3名、45点から59点までの中位の層に18名、30点から44点までの下位の層に23名となっていて、2013年度は特に中下位の比重が大きかった。中間層以下が51名中48名を占め、かつてはある程度存在していたそれ以上の層がほぼ消滅してしまったのは前年と同じであった。29点以下のほとんど基礎力のない学生は4名（前年は9名）に減っていたが、中間層上位の層も減っていたことで相殺され、前年と同程度の平均点となっていた。2013年度は中間層中下位に特に多くの学生が集中しているという傾向がよく見てとれた。90点以上のかかなり基礎力のある学生はひとりもいなかった。最高点は88点、次いで82点、80点、70点と続いていた。

次に、2014（平成26）年度の結果について見てみたい。66名が受験し、全体の平均点は約55.7点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表13である。

表13 2014年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	66名	約55.7点

受験者数は15名増加、平均点は前年と比べ9.9点の上昇であった。過去三年続けて最低レベルに留まり、平均点45点前後という短大がかつて経験したことがない低レベルに悩まされていたが、ここで一気に跳ね上がった。10点近い上昇というのは過去に例がなかった。得点分布を見てみると、ピークは50～54点のところであり、11名の学生がここにいた。その前後の55～59点に5名、45～49点に6名おり、大きな集団を形成していた。ピークが10点上がっていたことと、第2のピークがふたつあり、65～69点と30～34点のところそれぞれ8名いたことが2014年度の特徴であった。前年までは、ピークより下位の層の人数が上位の層よりも多く、グラフの形が下膨れしていたが、2014年度はそれが逆転していた。30点から74点までの中間層を見てみても、60点から74点までの上位の層に13名、45点から59点までの中位の層に22名、30点から44点までの下位の層に12名となっており、前年が上位の層がわずか3名、下位の層が23名だったことを考えると、ここに2014年度の躍進ぶりがうかがえる。29点以下のほとんど基礎力のない学生は6名、90点以上のかかなり基礎力のある学生は5名であった。この年度には、一般入試（薬学部・理学部）の短大第二希望で入学した学生が16名（坂戸キャンパス12名、紀尾井町キャンパス4名）おり、もともと短大第一希望であった50名の学生との得点の比較をしてみた。短大第一希望者50名の平均点は51.1点であるのに対し、短大第二希望16名のそれは70.3点とずば抜けて高かった。90点以上の5名（内、紀尾井町キャンパス1名）はすべて第二希望者であった。このことから分かったことは、2014年度のもともとの短大希望の学生のレベルはここ数年の中では一番高く、更にレベルの高い短大第二希望入学者を加えて全

体で前年より平均点 10 点の伸びになったということであった。短大第二希望者がレベルを引き上げた例は 2010 年度にもあったが、当時は文系学部不合格の学生たちであり、数値的に見ても 2014 年度ほどの衝撃ではなかった。薬学部・理学部を不合格になったとはいえ、受験勉強を経験してきたということがこれほど基礎力確認テストの得点の差となって表れるのかということを変更して実感させられる結果であった。

次に、2015（平成 27）年度の結果について見てみたい。65 名が受験し、全体の平均点は約 48.0 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 14 である。

表 14 2015 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	65 名	約 48.0 点

受験者数は 1 名減、平均点は前年と比べ 7.7 点の下落であった。前年に 10 点近く上昇したので期待されたが、残念ながら大幅に下がってしまった。大きく上昇した翌年はその反動で大きく下落するという傾向がここでも見て取れた。得点分布を見てみると、ピークは前年と比較して 20 点下がり、30～34 点のところに 12 名の学生がいた。第 2 のピークは 50～54 点（前年のピーク）のところにあり、10 名となっていた。このふたつの山だけで 2015 年度のレベルが想像できるが、更に詳しく中間層も見てみたい。30 点から 74 点までの中間層を見てみると、60 点から 74 点までの上位の層に 15 名、45 点から 59 点までの中位の層に 18 名、30 点から 44 点までの下位の層に 19 名となっており、やはり中下位層の膨らみが目立った。前年が上位の層に 13 名、中位の層に 22 名、下位の層に 12 名だったことを考えると、下位の層の 19 名、特に 30～34 点のピークにいる 12 名が平均点を押し下げていることが分かる。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は前年より 3 名増えて 9 名、90 点以上のかなり基礎力のある学生はゼロ（前年は 5 名）であった。80 点以上も 3 名しかおらず、最高点は 88 点（紀尾井町キャンパス）、次いで 82 点が 2 名であった。

次に、2016（平成 28）年度の結果について見てみたい。55 名が受験し、全体の平均点は約 49.4 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 15 である。

表 15 2016 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	55 名	約 49.4 点

受験者数は 10 名減、平均点は前年と比べ 1.4 点の上昇であった。前回は 7.7 点の下落であったので、やや不安があったが、前年と比較してわずかな上昇となった。得点分布を見てみると、

ピークは前年と比較して5点上がり、35～39点のところに8名の学生がいた。第2のピークはふたつあり、一つ目はピークのすぐ上の40～44点のところに7名の学生がいて、ピークと合わせて大きな集団を形成していた。もうひとつの第2のピークは50～54点のところにあり、同じく7名となっていた。30点から74点までの中間層を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に8名、45点から59点までの中位の層に15名、30点から44点までの下位の層に19名となっており、やはり中下位層の膨らみが目立った。ピークと第2のピークを含む下位の層の19名が大きく平均点を押し下げていることが分かる。2016年度の特徴は、80点以上の学生が、坂戸キャンパスに5名、紀尾井町キャンパスに1名の計6名（前年は3名）いたことであるが、29点以下のほとんど基礎力のない学生が7名おり、相殺される結果となっていた。最高点は96点（2名）、次いで90点、紀尾井町キャンパスの最高点は88点であった。坂戸キャンパスの平均点は49.3点、紀尾井町キャンパスの平均点は49.8点となっていた。

次に、2017（平成29）年度の結果について見てみたい。74名が受験し、全体の平均点は約50.3点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表16である。

表16 2017年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	74名	約50.3点

受験者数は19名増、平均点は前年と比べ0.9点の上昇であった。2017年度は日本人学生の数が大幅に増加したので期待していたが、前年とほぼ同程度の水準となった。得点分布のピークは40～44点のところにあり、10名の学生がここにいた。前年度のピークは35～39点であったので、5点上昇していた。第2のピークは3つあり、一つ目は、ピークのすぐ下、前年のピークの35～39点のところに7名、二つ目は、そのすぐ下の30～34点のところに7名となっており、ピークを含めたこの3つが大きな集団を形成していた。3つ目は55～59点のところに同様に7名となっていた。30点から74点までの中間層の中の上位の層（60点～74点）と中位の層（45点～59点）と下位の層（30点～44点）を詳しく見てみると、上位の層は11名、中位の層は18名、下位の層は24名となっており、下の層に行けば行くほど数が多くなり、グラフの形も下膨れしたものになっていた。75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は9名おり、90点以上のかなり基礎力のある学生2名を加えて11名の本学のトップ集団を形成していたが、29点以下のほとんど基礎力のない学生が10名おり、相殺される結果となっていたのは前年と同じ傾向であった。坂戸キャンパスの平均点は50.9点、紀尾井町キャンパスの平均点は49.1点となっていた。最高点は90点が2名で、坂戸に1名、紀尾井町に1名となっていた。

これまで、2002年度から2017年度までの結果を見てきたが、2018年度と2019年度について

は、中島が UC Riverside Resident Director として米国に派遣されたために試験が実施できず、この2年間についてはデータがない。2020年4月に2年ぶりに再開する予定であったが、冒頭で述べた通り、新型コロナウイルス感染拡大のため、前期においては授業開始が5月に遅れ、またオンデマンド型のオンライン授業が実施されたため前期には実施できなかった。後期においてもコミュニケーション基礎英語についてはオンライン授業が継続されたが、Zoomによるリアルタイム形式の授業に変更されたため、1月にはどうにか実施することができた。しかしながら、依然として対面ではなくオンライン形式であったため、WebClassでのオンライン試験とせざるを得なかった。これまでと違う点は、対面試験ではなく WebClass を利用した自宅でのオンライン試験であったこと、受験者数は全体の4分の3程度であったこと、1月実施の年1回であったことの3点であった。

2020（令和2）年度は、外国人留学生を除く94名が受験し、全体の平均点は約71.1点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表17である。

表17 2020年度英語力調査結果（1月実施：WebClass）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	94名	約71.1点

単純に2017年4月実施の結果と比較すると、受験者数は20名増、平均点は20.8点の上昇となった。2020年度は1月のみの実施であったので、ここでは直近の2018年1月に実施した2017年度第2回の結果を比較対象とした。2017年度第2回（1月実施）は70名が受験し、平均点は52.3点、最高点は90点、最低点は14点であった。同年度第1回目（4月実施）より2.0点の上昇であった。30点から74点までの中間層の中の上位の層（60点～74点）と中位の層（45点～59点）と下位の層（30点～44点）を見てみると、上位の層は12名、中位の層は17名、下位の層は22名となっていた。75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は10名、90点以上はかなり基礎力のある学生は1名、29点以下のほとんど基礎力のない学生は8名であった。これと比較すると2020年度の数値は驚異的であった。まず驚かされたのは、71.1点という平均点の高さであった。ここまでの高い平均点は過去に例がなかった。2017年度第2回の平均点52.3点から18.8点の上昇となっていた。得点分布グラフの中のピークはふた山あり、70～74点と50～54点のところそれぞれ13名の学生がいた。70点台のピークというのも非常に高いレベルとなっていた。中間層に目を向けると、中間層上位の層に28人、中位の層に21人、下位の層に6名となっており、上に行けば行くほど人数が増える理想的な分布となっていた。さらに、75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は21名、90点以上はかなり基礎力のある学生は18名、29点以下のほとんど基礎力のない学生はゼロであった。94名中87名が

50点以上で、50点以下は7名のみとなっていた。前年までとは試験のやり方そのものが違うため単純に比較することには無理があると思われるので、この年度のデータは参考値程度に留めておきたい。

次に、2021（令和3）年度の結果について見てみたい。2021年度は、2017年度以前と同様に、対面形式で同一問題を使用して英語力調査を実施することができた。外国人留学生を除く74名が受験し、全体の平均点は約52.1点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表18である。

表18 2021年度英語力調査結果（4月実施：対面）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	74名	約52.1点

信頼できるデータとして最も新しい2017年4月実施の結果と比較すると、受験者数は同数の74名、平均点は1.8点の上昇となった。得点分布グラフを見ると、ピークは2017年度と同じ40～44点のところであり、11名の学生がここにいて2017年度の10名と大差はなかった。第2のピークはふたつあり、60～64点と30～34点のところにそれぞれ8名となっていた。60～64点という高いレベルにある程度の学生が集まって第2のピークを形成することは近年では珍しく、グラフも興味深い形になっていた。30点から74点までの中間層の中の上位の層（60点～74点）と中位の層（45点～59点）と下位の層（30点～44点）を見てみると、上位の層は17名、中位の層は13名、下位の層は23名となっていた。下位の層が23名と多く、全体としてグラフがやや下膨れしているのはこれまで通りであったが、目を引くのは上位の層と中位の層が逆転していたことであった。2017年度は、上位、中位、下位、それぞれ11名、18名、24名となっており、下の層に行けば行くほど数が多くなっていたが、2021年度は上位の層が中位の層より4名多くなっていた。さらに、75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は8名、90点以上のかなり基礎力のある学生は3名いて、合わせて11名の本学のトップ集団を形成していた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が10名いて、下位の層の23名と合わせて全体を引き下げたので平均点はそれほど上がらない形になってはいたが、基礎学力のある学生の入学が少しでも増えたことは喜ばしいことであった。坂戸キャンパスの平均点は約51.8点、紀尾井町キャンパスは約51.6点となっていて、ほぼ同レベルであった。

3. 今年度の結果について

今年度も昨年度に引き続き、2017年度までと同様、同一問題を使用して年2回の英語力調査を対面形式で実施することができた。ここではまず4月実施の第1回の結果について検証して

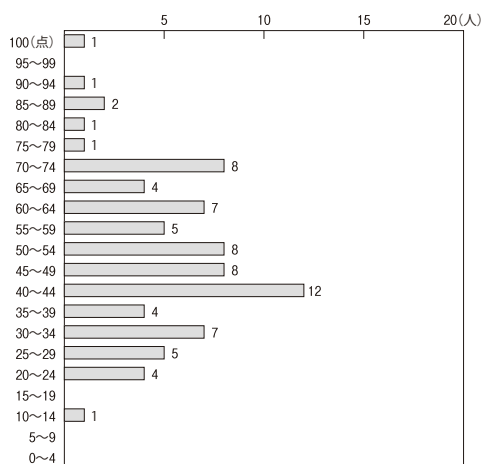
いきたい。出題形式は全問マークシート方式、試験時間は1時間、全50問で100点満点の試験とした。外国人留学生を除く79名が受験し、全体の平均点は約50.3点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表19である。

表19 2022年度英語力調査結果（4月実施：対面）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	79名	約50.3点

昨年度と比較すると、受験者数は5名増、平均点は1.8点の下落であった。昨年からやや下がりはしたものの、平均点で50点以上というのは近年では決して低い数値ではない。近いところでは2017年度（受験者数74名、平均点50.3点）とほぼ同程度の水準となっている。まずは得点分布グラフを見てみたい。

2022年度英語力調査結果得点分布グラフ（4月実施）



ピークは2021年度、2017年度と同じ40~44点のところにあり、12名の学生がここにいる。今回は第2のピークは3つあり、上から70~74点、50~54点、45~49点のところに8名いる。注目すべきは70~74点という高いレベルにある程度の学生が集まって第2のピークを形成していることである。この傾向は昨年にも見られたが、昨年の第2のピーク60~64点（8名）を10点上回っている。第2のピークの50~54点（8名）と45~49点（8名）はピークの40~44点（12名）と一体となって28名という大きな集団を形成しており、全受験生の3人に一人以上がここに属している。30点から74点までの中間層の中の上位の層（60点~74点）と中位の層（45点~59点）と下位の層（30点~44点）を見てみると、上位の層は19名、中位の層は21名、下位の層は23名となっている。下位の層が23名と多く、全体としてグラフがやや下膨

れているのはこれまで通りであるが、それでもほぼ同数の学生がそれぞれに点在していて、それぞれの層が2名差で肉薄している。平均点が昨年度を上回らなかった理由は、中間層以上の学生数と以下の学生数の差であろう。75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は4名（昨年8名）、90点以上のかかなり基礎力のある学生は2名（昨年3名）いて、合わせて6名の本学のトップ集団を形成している。これに対して、29点以下のほとんど基礎力のない学生が10名（昨年も10名）いて、下位の層の23名と合わせて全体を引き下げているので、平均点は昨年以上には上がらない形になっている。とは言っても、2011年度から2013年度にかけて平均点が45点前後を行ったり来たりしていた時と比較すると最近ではだいぶ底上げがされているように感じられる。学生の反応も当時とは比較にならないほど良くなったと思われる。坂戸キャンパス53名の平均点は約50.0点、紀尾井町キャンパス26名の平均点は約51.0点となっていて、紀尾井町キャンパスの方が僅かに高かった。

4. 1月実施の英語力調査およびTOEIC® Listening & Reading IPテストの結果について

これまで、4月に実施された英語力調査を基にして、今年度の学生の英語力を考察してきたが、1月の後期の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施し、どの程度スコアが伸びたかを調査し、年間を通じてどの程度学習成果を獲得できたのかを測定した。第1回目（4月実施）と第2回目（1月実施）のテストの平均点と得点差をまとめたものが表20である。

表20 2022年度英語力調査結果比較

第1回目（4月実施）	第2回目（1月実施）	得点差
約50.3点	約54.0点	プラス3.7点

第2回目（1月）は70名が受験し、平均点は54.0点で、第1回目より3.7点の上昇であった。2008（平成20）年度以降の得点差推移を見てみると、2008年度：プラス1.7点、2009年度：プラス4.0点、2010年度：プラス3.8点、2011年度：プラス4.7点、2012年度：プラス5.0点、2013年度：プラス2.3点、2014年度：プラス2.7点、2015年度：プラス4.9点、2016年度：プラス0.9点、2017年度：プラス2.0点、2018～2020年度：データなし、2021年度：プラス5.1点となっており、今年度のプラス3.7点はまざまざの上げ幅であった。今年度の学生がこのようにある程度高い学習成果を獲得できた理由のひとつは、先ほど述べた6名の本学のトップ集団の存在だけではなく、その集団が周りの学生たちに与えたよい影響があったように感じられる。今年度は昨年度と比べて4月の時点ではそれほど全体の平均点が高いわけではなかったが、その学生たちを中心に授業に積極的な学生のグループが生まれ、それが他の学生によい影響を

与えたとと思われる。授業のペアワークの時などでも、うまくできない学生をできる学生が教えている姿をよく目にした。得点分布グラフを見てみると、ピークはふたつあり、70～74点と50～54点に9名ずつと大幅に上がっている。30点から74点までの中間層のバランスを見てみると、上位の層（60点～74点）は20名、中位の層（45点～59点）23名、下位の層（30点～44点）15名となっており、下位の層の比率がかなり低くなっている。75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は3名（4月は4名）、90点以上のかなり基礎力のある学生は3名（4月は2名）となり、合わせて6名の本学のトップ集団についてはほぼ変化はないが、29点以下のほとんど基礎力のない学生は5名に半減している。グラフの形状も4月のやや下膨れた形からは大幅に修正されている。

また、今年度も、7月に坂戸キャンパスで実施された第1回 TOEIC® Listening & Reading IP テストを受験するように指導し、坂戸キャンパスの学生が1名受験した。全学との比較は表21の通りである。

表 21 第 1 回 TOEIC® Listening & Reading IP テスト結果

大 学	受験者数	平均点
短大（坂戸）	1 名	440 点
全学（坂戸：短大含む）	45 名	396 点

今年度も昨年度同様、新型コロナウイルス感染拡大の影響で受験者数は少なかった。短大坂戸キャンパスは1名受験で得点は440点であった。紀尾井町キャンパスでも実施されたが受験者はいなかった。この他、短大生の受験はなかったが、全学坂戸キャンパスでは、第2回（8月）と第3回（11月）の TOEIC® Listening & Reading IP テストが実施された。第2回の受験者数は15名、全学平均点は367.3点、第3回の受験者数は44名、全学平均点は366.5点であった。

5. おわりに

最後にもう一度、全体の調査結果を振り返り、今後の英語教育の指導について考えてみたい。2002（平成14）年度から4月実施時の平均点の推移を見てみると、2002年度：56.9点、2003年度：54.5点、2004年度：50.5点と年々下降の一途をたどり、2005年度に56.5点といったん上昇に転じた。しかし2006年度に48.3点と大きく下げ、2007年度：51.0点、2008年度も51.0点と戻したが、2009年度は46.0点と下げた。2010年度は53.5点と大きく上昇したが、2011年度は43.7点と過去最低を記録し、2012年度：44.9点、2013年度：45.8点と3年連続で45点前後の低水準で推移した。2014年度に55.7点と10点近く上昇したが、2015年度に48.0点と7.7

点下落し、2016年度は49.4点、2017年度は50.3点であった。2018年度と2019年度のデータはなく、オンラインで実施した2020年度1月は71.1点（参考値）、2021年度は52.1点、2022年度（今年度）は50.3点であった。今年度は特に良くも悪くもない平均点からのスタートであったが、平均点が50点を超えていたこともあり、学生の反応は悪くはなかった。当初からある程度基礎力のある学生が一定数いて、この集団が他の学生により影響を与え、全体として年3.7点の学習成果の獲得を実現することができたのだと思う。今年度は、年間を通して対面授業を実施することができたが、2020年度以降に実施してきたオンライン授業のノウハウを積極的に活かすように努めた。具体的には、WebClassを利用した統一課題と試験の実施、Teamsの利用、パソコンを用いた音声・映像の授業への導入等が挙げられる。今年度はこれらのある程度効果的に授業に活用できたと思っている。加えて、ペアワーク等のアクティブラーニングの要素も授業に取り入れ、単に学生が座って聞いているだけの授業ではなく、手や口や体を動かし、間違ってもいいので何とかコミュニケーションを取るように指導したことも効果的であった。今後もこのような授業方法を継続しながら発展させ、学生たちの更なる学習成果獲得に向けてより魅力的な授業に改善していこうと考えている。